



東江先生書話

門生

橋圭橋編録

唐の太宗虞世南を師とすたまひて

唐の太宗虞世南を師とすて書を学びて

一書に戈法御心のあましく出来ざりて

一書にめりある日戩の字を書きまひて

のらて世南に填させられ他日魏徴を

られたるハ朕世南が書とぞん下その法をつ

に似たり。汝これを見よ。て。み。戩の字をみ
 たまふ。その時魏徴すんで奏し。る。天筆を
 以て臨し。ふ。ふ。象の形をのぐる
 あ。臣等が擬すべきふ。あ。されども仰
 て聖作を見なれば。戩の字の戈法すこぶる真に
 せまり。やうに存せしめれば。帝も亦く魏徴
 が深識を感じたまひしとあり。
張懷瓘書斷
 に見ゆ

張旭の書と貯て富を得たる話

張旭の書ハ當代小まへせられて。ほる人みな重

寶とすある人あまづ。て。朝夕のいとらみ
 きたえく。なる。と。思ひより。張長史の
 ちつき。月。一。長史の許へ
 書簡をおくりて。その報章をほて。市にもて
 ちろる。れば。人々あつて。これを
 とあける。け。人のらに。富をほる。と。よ。
金壺記
 にみ

水神山谷が書を好む話

五采老とよふ人。他國より故郷へ歸る路。江を
 渡ると。い。とき。大風志きり。に。て。七日

が間流るるすをほすいくせんとためしひ居る
にふの父老トすハ君の篋中キヤウニタクにかるるす寶物あ
るなるんげふの江神靈レイあれバきくめてこれと
しふてく風をおく。君の糸イタをとめあまな
ぶし。もー寶物あはれを献してお神とい
のりふまぶしとをーしる。業老さげとて
篋中シヤウとひしき。秘藏の玉乃塵尾レユビを献しるに
風ハまごのぶしとなり。又おもひちて。端硯一枚
とさりちて献しる。風ハいふくさげく

吹てやまざりける。又席帳シヤクテウを献していのるに。皆
さしん志しとあかくていカも及ばす。その
目もくれたる。換よりて臥しておもひ出るハ
篋中シヤウと黄魯直クワロク草書ソウショを以てくける。韋應物ウエイオウが
詩の扇面シヤウメンを持し。これを献せむやと思ひ。とく
起出て川波にむりひて扇を献じいのりれ。
香火カウカいよごをさめさるに。天水テンスイきあうに急い
ト。南風ナンフウおもむらに來りて。大風ダイフウハくらまらや
ぬ。く小おのて。業老ハやすく流るるすをほす。

とぞ 冷齋夜話 和浄名人のくふはうる奇異の事
とも傳わると多し。

米元章書癖并に風致ある話

徽宗帝 米芾 に命じて詩句をえらみて浄屏
に草書をかかせられり。その書就の雲をいづる
いさひありけれ。帝稱歎して名下靈士なり
とのたまふ。とくに米芾用ゆる所の硯めい石なれば
心ふくれとほくおとし工夫をめぐり書
やむとそのお。硯をとりてぬとろろにひ入

るほどに墨汁淋漓して衣裳なれ出たり
すてよして奏ける。硯臣下の手にあられれば
婦々び帝すすきふあはれ。臣すくにお賜
すべしとてそ御衣をまくりるとなる。又ある
時人のもと書簡の返書せんとして志々あはれ
と親舊の人ひそくに窓乃ひまよりうひ入るに
その書のす急に芾再拜と書をはりて筆をお
頭ふさしおき襟を絞ひてあなとおしりといふ

清波雜誌 元章ハ性質潔疾ありける。ある日朝廷小

て靴を人小穿うられ。これときみわらくおもひ
 てその靴を上げくあひらぎし。又婿をえらびしとき
 てくくるをたぬずし。又婿をえらびしとき
 建康といふ所に段拂字ハ去塵といふ人あり。宋
 帝これを釋ていひら。すでに拂といひ又塵と
 さるといふ字なれば。吾が婿にすまき人なること
 て女を妻せらるることなり。宋高宗翰墨志にり 又真州にある
 一とき蔡攸といふ人小船申ふてあひら。かの入
 目ハ元章が書を好めるといふて。右軍の王略帖を

出して見せらる。元章入ておどろき影ドて他の
 画をもつては帖にうへんす。ともむるに。蔡攸は
 さざり。元章おもひつめていひける。ハもい帖
 とたまら。ずんばれ。け江小投して死せん
 いま。かの帖といひき。なぐ。船をこにすうて
 すでに墜ん。あひら。蔡攸もせん。た
 て是をおくり。世説惑溺篇に足り

墨帖とて王元美の詩句を解る話

弇州王元肅參軍に贈りたる詩に。相視右軍

脩契帖。未域中散絶交書といふ對句あり。詩を
解とのいふときけは参軍ハ王氏なるゆゑ右軍
の字を用ぬ契帖ハつて業々帖と見たるも
あやうと。れ用ぬて作りきるづといふ。志う契
帖と見たるといひ。よふてさのこふ妙なる句と
もきこえぬ。後に王履吉の白雀帖と見たるが。王
元美の跋あり。これと讀んでくらめての句のさ
味を知りくも。その文に。王履吉ある日故人王元
甫を雲山といふ所へたつぬれが逢すして長

篇の詩一篇を作れり。元甫外より歸りてきま
船をもよほ。やがて履吉に追付て。くさん乃
詩をうつされもとむ。因て二丈ごりの絹
とひろげて。筆とろい。いまに。た。ち
書。一。る。が。天骨飄然とて。威鳳千仞のいきね
ひあり。その後一月餘とるて。履吉ハこまうりぬ
それより又二十餘年を経て。元甫のの軸と雙
鈎して。石にきざみ。王元美の跋をとくとと
す。かの相視右軍脩契帖とあるハけ軸とさして

いふなるべし。これ等の類。読むのうらにまゐるべし。博雅の人ふたづまうすべし。

美立綱々書日本に法ありて話

名山蔵に日か山てきま十三丈の門をたてしとき。明朝使をつくるて。額をもとめらる。その時美立綱々書の名高りて。宮殿の碑額の数多くその筆を用ひらる。因ては額をも立綱書といふ。吾朝中。張即之。趙子昂の題署なりとて傳へたるゆゑに。美立綱の額をつくるるゆゑに。

うぐ。は卯異朝名人の書と。吾邦一つとくちる。諸書に及ぶれども。これとるべきものもあらず。今世に。蘇東坡。米南宮。趙吳興。祝枝山。王雅宜。文衡山。董太史らの真蹟なりとて。宝寶する巻軸とるるに。多くは贋作なり。真なるものはまれなり。中古歴代秘府の蔵書。及び徳が珍藏の書も。出偽ありとて傳へれば。後世にいらしてはいふもさうらうなり。

徐子仁が髯拂子に傳へて話

明の徐子仁。碑版とついでときハ。顔魯公。柳公権
 の體を擬し。題榜大書の類ハ。詹孟舉と法とす。
 くれよりりて。その名海内に高きりり。日本の使
 臣も。子仁が筆法とせれば。珍襲して持歸りり。
 武宗南巡し。まゝいし。子仁を紹寧にめされ
 り。ふ。とらふ。雨志きりに降し。帝すまを
 ち子仁が宅に幸なり。うまひり。子仁ハ髯をく
 るくし。さる。まもばあもおよび。武宗子仁に
 ひうもせたまひ。汝が髯あまりふん。なれば。朕に

けり。べし。とて。まづ。その髯とまはりて。拂子
 とらふ。とまふ。子仁。これよりみづ。髯羽と號と
 あつた。む。名山蔵。子仁。まゝ。篆書を結せり。集本
 堂法帖に。縮字の會稽碑とのせたり。

宗楚客名筆を集て屏風小張一法

唐の中宗のとき。中書令宗楚客といふ人。書を
 奏聞して。上の恩以。つら。する。とら。三五
 の真蹟二十卷をたま。楚客。く。人の生
 記。な。びに。褚遂良の閑居の賦。枯樹の賦と張

つね十二枚の屏風をとりし。或日客をよめま
てこれを志す。帝よりお賜し。るをよめ
ます。とくに薛稷崔湜盧藏用の筆。食をやめ
て。これを新美し。やして酒宴をもよ
め。さうに無さあしていふをえん。その座
にあ樂らまの婿。武延秀といふ人あり。海りて後
公王にむかひ。啓し。とされ。いふは。宗令のこ
へまぬれ侍る。彼別に恩をかりあり。代はづ
し。きさ。記をもお賜し。と。一席にて。こを

えん。人ね。やみ。とめ。い。な。それ
いら。思。さ。ふ。り。て。も。富貴。を。ば。ぬ。ぐ。い
や。さ。ず。それ。あ。そ。う。山。い。と。さ。れ。る。
ま。つ。ふ。さ。い。ゆ。い。ひ。明日。帝。謁。見。あり。て。い
る。と。み。奏。し。たま。ひ。と。帝。さ。は。と。て。
佛。庫。乃。真。蹟。の。武。延。秀。に。賜。つ。と。る。延。秀
も。ま。さ。あ。る。と。も。ね。き。て。それ。を。志。す。い。は。し
と。あ。つ。と。徐。浩。古。蹟。記
い。は。し。ら

墨本を作つて始すの語

宋の太宗帝御府に在りしもの歴代名人の書蹟を抄りて侍書王著に勅命ありて禁中において模刻せしめあつめて十卷となり。淳化閣帖と名づけしもの。これと歴代法帖の祖といふ。法帖譜系よりおふ代の時法帖二部あり。一ハ澄清堂法帖といふ。唐の賀知章より古人の書を摹ししもの。南唐の李后主のとき石ふりつゝきざりしところなり。一ハ昇元帖といふ。明の邢子愿が説に以て南唐の徐鉉等摹刻せりといふ。此二部まこと

以法帖ときざりしはドめちるもこれと後世よゝゝえて入る人なり。明の時董其昌澄清堂の殘本右軍帖とてその家の魏鴻堂法帖の末のせしめれり。吾朝まで古來打碑法の墨本ときざりたるもときくす。高天濤先生長崎まで草書千字文と書水と。藤正栄といふもの。雙鉤して板に刻みしり。これ打碑法のものである。天濤先生獨立禪師より此法を傳授して後人にも傳へられしなり。今いせに廣くなりたる。

懷素自叙帖の語

懷素自叙帖の書法。宋の代湖水の運判承識
 郎蘇泌といふ人のもとにあり。おの一帖破砕
 て存せざりしを。蘇泌の父舜欽これをおきた
 くれしとあり。そのころ杭州の沈氏といふもの板を
 に刻みしり。米元章の寶章待訪録にみり。淳
 熙秘閣續法帖第八卷に。自叙帖をのせしれり。
 其の法ハ明の世までありしや。今の世に傳ふるハ
 文彭徵明が摹すところなり。渴筆賊毫に

まで。續帖のむとたがも。善本といへ。

一字值千金といふ話

懷素の草書千字文と千金帖といふ嚴氏書畫記
 に。昔書法とて海鹽の姚氏といふ人の家につく
 る。そのころ人秘藏して。一帖一字值千金なり
 といふゆへに。千金帖となづけしり。その後傳雲館
 法帖のころ一摹刻せり。又別に大字の草書千字文
 あり。摹刻ともいふる。

趙子固蘭亭帖八字を題せし話

五字不損ハツちとつ小蘭コランや帖テウの摹モ本ホンあり。宋ソウのとき
堂タウ後ゴ官クワン盧ロ宗ソウ邁マイとつ小人コジン代ダイくもら侍シへーが。その
後ゴれこれの家ケ藏ゾウとなつて。とらう小趙コテウ子固ココとい
ふ人もとらう。子固ココこれととらう。とらう。とらう。とらう。とらう。
子固ココとらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。
毎山バイサンとつ小水コスイのふもとふて。毎バイとらう。とらう。とらう。とらう。
ぬ。新李シンリのたひみ水スイにひく。ながれこれとらう。さいは
ひに浅シヤきふなれ。子固ココひ巻マキをとらう。洲スのうふ
とらう。後ゴ者シャふひく。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。

おそくふあり。その他のおオすてとらう。とらう。とらう。とらう。
かんとつひく。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。
め。性命セイメイ可カ輕ケイ至寶シホウ是保シホウといふ八字ハチを題テイして。な
く至寶シホウといふ。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。
雲煙過眼録
にん

鍾繇尚書宣示帖由来の話

鍾繇テウテウが尚書シヤウシヤウ宣示センシの帖テウは。もと晋シンの丞相シヤウシヤウ王導ワウドウの家
にあり。過カ江カウのとき。にりて。王導ワウドウふつと衣イ帯タイ
のうらにく。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。とらう。
とらう。逸少イツセウとらう。王ワウ導ドウにわらう。王ワウ導ドウ苑エンする。とらう。

その母情が平生實として秘藏してゐるに
て。因づく棺小つれて葬りたる。比とき尚書宣示
の書詔に遂に日ろびらせし。今淳化法帖にのせ
る。宣示帖ハ。王右軍の臨書せしむるなり。

法帖刊誤
小みしり

大王書樂毅論傳來の話

王羲之の樂毅論ハ正書古今の第一なり。梁の
代すで小模出でて。天下にこれ成珍とせしむる。法
書
録要
唐乃太宗崩御のとき。因づく昭陵へとさめて

世につくさる。朱梁のとき。耀州ヨウシュの節度使。

温韜ウンタウといつる者。昭陵を發きて。これをばり。因て

かゝる世間小つとふ。一説に。太平公主。樂毅論の偽

作とつくりて。とりたれ。其詔ハもと廣小つれ

すとす。夢溪筆談宋の時に及んで。高伸カウシ學士といふ人

樂毅論ときさめる石を拵り。高伸死し。時。

家人これを賣ち。つとふととす。ととす。好カウズ

の人。とりくそのおに。いりて。石について。傳模せ

し。い。そのおと。いりて。賣ち。する。を知りて。深

秘苑一にあり。その後、録家おつてくわつて、白石
と富人の方へ質物おつてくわつて、後、富人の家へ
火して、遂にその石ももにやけうせうとつた。
集古録に金石録小、白石やけす。宋の元祐年中。
郎官の趙諫といふ人のもとに秘して持る。その時
石断裂せし。木を以て匣を作し、石を貯おきて、
しし親友墨本をもとむるものあれば、趙諫か
らけいづつて搦て、れをおくりぬ。諫みまうりく
後、石のありうと志すといふ。徐浩が古蹟記小、太

平らに藉没のとき、咸陽の老嫗ひくわん樂毅倫と
ぬすみて、くわんを、縣吏さうりて、嫗とくわんへ
んとす。嫗おとろきおつれて、それを竈下になけ
りて焼すてくわん。これより生かぬ、永くせうせけ
り。按ずるに、今淳熙秘閣續帖にのせたる樂毅論ハ
梁の世の摹本なり。戲鴻堂法帖小のせたるハ唐の
摹本なり。

一日に三萬字を寫す話

元の康里子山ある町あり、對して、同くハ一日乃

くらん。幾字と作らば。さやと。あ。と。て。趙學
 士。一日。ふ。く。一。萬。字。と。し。つ。ひ。と。い。ひ。り。子。山。か。い。ひ
 余。ハ。一。日。の。く。ら。三。萬。字。と。書。て。筆。を。も。む。る。は
 と。い。ふ。先。年。駒。郊。吉。祥。寺。に。江。湖。あ。り。て。僧。徒
 多。く。あ。つ。ち。り。某。の。書。と。求。る。もの。あり。さ。し。は。と
 て。日。と。約。し。期。に。及。び。て。さ。か。の。ち。に。紙。を。れ。ば
 か。ま。て。よ。う。い。い。り。く。ん。墨。多。く。す。り。よ。め。紙。數
 幅。と。つ。み。て。數。も。志。れ。ば。尺。二。ぬ。も。い。め。の。日。と。ハ
 次第。し。て。紙。を。ち。り。く。る。が。後。い。て。ん。で。小。す。み

よ。り。て。讀。小。應。ず。る。も。な。り。く。さ。ん。と。り。
 日。も。く。ぶ。く。さ。終。傍。の。人。い。ひ。る。書。紙。を。千。紙
 小。あ。ま。り。ぬ。と。い。は。れ。る。の。り。い。ふ。の。の。れ。小。て
 だ。り。く。き。る。に。あ。り。た。す。く。小。て。も。合。作
 なる。書。と。し。つ。し。出。す。た。し。を。か。さ。ら。う。た。れ。多。く
 書。ん。と。す。れ。ば。お。の。づ。く。倉。卒。に。ち。り。て。法。度。と
 も。う。い。ひ。遂。に。粗。怪。怒。張。の。體。と。生。れ。その。書
 の。く。ら。と。て。何。う。せん。す。て。一。時。に。愉。快。な。る。も。り。
 證。ち。き。く。す。と。お。も。い。ふ。

王羲之洗硯池并業之故蹟の話

沂州といふ地に池あり。つゝいふ晋の右將軍
 王羲之の澤筆池なりと。一名を洗硯池とも云
 べし。もと右軍の舊宅にて。かくもくくに曠書堂
 ある。年代久きを少してむろくあれとて之
 ども。今清朝小乃んで。移るの故址僧舎となつて
 て。祠堂のうちに右軍の像を置く好事の人々
 憑弔の詩文を以て初小とさむ。その日とりに洗硯池
 としふ三大字を雕る石あり。清朝小りてハ

斷闕して今もわすれずといふ。康熙帝萬機の餘

餘く右軍の書法を好む。字いむひらるが。勅して

業之の故址ともあつて。晴理してまひ

とあり。康熙帝洗硯池
 賛の序に及ぶ

康昕惠式義獻の書と贗する話

晋の世康昕字君明といふもの。外國より中國小
 ありて。官にす。臨沂縣の令となり。けり書を
 好みて。右軍父子の筆法をそのひかり。ときれは故
 方山庭殿の題書とて。康昕ひかりの書ありと

めておきし。子敬のらに是を以て。吾が書
法書のりと思ひて。いかにさういふと
王右軍のりも王家の王子乃
書と云ひし。康昕とともに見つゝ書を作
つて。二王の筆なりとて人ふりりる日どに
志しざるものにあやまらてこれと筆献の筆に
なりとおもひ。賢とてさるもの多かりしと
書断に
んり

代書人并右筆といふ話

陶隱居景武帝に答る啟に。王羲之欽仕の後。み
づゝ書を作るをやめて。ある人ふめいと。これの
れが書に。いかに。世の人これを見つる
あつて。子啟年十七八のころ。もつと。び人の
書と云ひたれば。よくおぼし。後の世に。代書
と。右軍未筆の書なりといふより。尺く。され
と。王羲之代書人といひ傳ふるの。其人の姓
名ハつゝ。傳はる。按するに。簡牘は復は
右軍自筆と申わて書れ。ふあ。書記乃

人へのトて書でしれたるなる。度雅恭王
 逸少にあつた書にいとく。吾が伯英の章
 草十紙ある。過江のとき亡失せし。常はめ記
 の永く絶つるを歎き。忽ち足下の家兄
 に着る書を見る。煥として神明のぶとく。頼
 観ふるるといふ。これと推ておもふに。尚時ふ
 ても右軍自書の簡牘をばあるもの。皆實と
 しくなる。代書人の和朝の佑筆ふ似たり。佑
 筆ハ。武家の史官ふて。頼朝卿のふるるをば
 観ふるるといふ。これと推ておもふに。尚時ふ
 ても右軍自書の簡牘をばあるもの。皆實と
 しくなる。代書人の和朝の佑筆ふ似たり。佑
 筆ハ。武家の史官ふて。頼朝卿のふるるをば

る。貝原氏東鑑をりて修せしむ。

梁の元帝三品の筆を定めたる事

梁の元帝いよぐ湘東王とて。學問を
 好む。忠臣義士文章の士を新美し。三品の
 筆を定めし。忠孝を
 たきもの。金管の筆を用ひて書し。徳弘清
 粹なるもの。銀管を用ひて書し。文
 章贍麗なるもの。斑竹の管を用ひて書し。文
 とちり。唐詩紀事。又臨川王の子。白き團扇を

とくは、湘東王の扇八字を題して、
とて、宋の太宗も、毎年暑月におさうりて、團扇に
御書と題して、館閣の學士に賜して、あつた。

古錢、宸翰ある話

錢、萬代の寶なり。中華にて、皆時の餘書とえ
らびて、その文とくせられ、ちる。唐の武徳四年、
開通元寶の錢を鑄られ、國史異纂に、開元通寶と云ふ、ハ、あやまりなり。時、
歐陽詢の文字を書き、宋の淳化年中の錢文を、
太宗帝宸翰とて、草書に、世に、

崇寧大觀の錢文、みる宸翰なる。草書少く、錢文
と、侯鯖録に、と、淳化年中、と、始、

又徽宗帝、子、子、命して、錢を鑄させられ、

範格を、イ、觀覽、カ、乃れ、ハ、徽宗大、ハ、よ、ハ、こ、ハ、び、ハ、御書と

以て、宣和通寶の字と、宋史子道傳に、なり、永樂通

寶の錢、ハ、明朝太宗皇帝の永樂九年に鑄られ、

その時、吾朝の僧中正と、ハ、もの、中華へ、ハ、て、ハ、異

國天子の勅命、ハ、て、永樂通寶の文、ハ、と、ハ、書、ハ、なり、

僧中正ハ相國寺の僧、
和語連珠と、ハ、書、ハ、なり、京都將軍足利義滿の、ハ、時、明朝へ

なく使僧しやうもまじり。永樂えいらく跡あとを持もつる。比ひ跡あとを格かく
とて。比ひ邦ほう小せうても鑄ちゆうさせしむ。信長しんちやうの太閤たいかうを登のぼりて
國初くにのはじめでも通用つうぎゆうせしむ。

宋の章惇石壁に書を題せし話

宋の章惇しやウヂン字あハソハソ蘇軾そしやくと同どうく。南山なんざん小遊せうぎゆうび。仙遊せんぎゆう潭たんと
いふの下したにいいく。絶壁せつぺき萬仞まんじん。風景ふうけい華かふ及およびごとく。
依よて木きを横よこつてゆゆり行ゆく。石壁せきぺきに題書だいしよせんといふ。
子厚しこう東坡とうぱに攝しやくして題だいせよといふ。蘇子そし恐懼きうぐわいして涙なみだ
るるをほほろりろりく。子厚しこうするもち衣いをきけて平へい

歩いて後あとりる。索さくをたれて樹じゆにむすび。これ小せうす
かりて石壁せきぺきのもとにたりりく。漆しやく墨ぼくをもて。蘇軾そしやく章
惇しやうてんのふ五ご大字だいじをたける。ゆりあつて神しん報ほうをせむ。
とらふと。宋史そうしにいづづ。某か先年せんねん上野じやうの小遊せうぎゆうび。高橋たかはし子啟しき。
長野ながの子顯しけんの輩はいとせり。南牧なんまきの小澤せうさくといふ。ふふいいく。
比ひ地ちのふ一いつ乃の洞どうあり。洞どう口くちわわづづくくに四五尺しよごふしちももあり。
て。やくやくくくりり入いるる。ふふくくりり入いるる。下した小せう冷れい
といふものものををくくりりて。やくやくりりままにに結むすぶぶ。下した小せう冷れい
水みづ湛たん乎か。夏なつといいふふも氷こおりををふふむむががままとと。裡うち

八間をふして十間をくりもまゝに洞裡に毎天の
 像をあ置す。その奥が一卑くして又洞あり暗
 して又えぐく。火をとんどて入れ、濤の聲、瀑
 くして。磨きこみ海ふひとく。深きくま
 なるを走らす。洞を出て走ばく細細く、
 かのく詩をうんと作して飛ゆる。まゝに里正小澤
 氏墓に建て。洞上に題書せよといふ。洞上高く
 木といふも。木のまゝくべきにあ。ぬは、遂縮して
 すみぢきりし。小澤生社客にめいとして。様子三四

條とさつきさつきと。めくれを洞にいとたぐりけ
 返。木をもて結つけ。へいさきひろき板を
 梯と。筆硯をぬき。様子よりつとへのりて題せ
 らし。さうして洞口の石壁を攀攀て。天女窟といふ
 三大字を題し。後に小澤生。の大字を石匠
 小めいといきざみたりといふ。

日本の書中國と抗衡する話

本朝のいみじく。唐の禮典をとり本ぬれ。は
 經學文章詩賦の教。いふもさき。なる。書法

いづりくも。そや。晋唐の體と学びたり。唐書
 日本傳に。建中元年。使者真人興能。方物と献す。
 興能書とよき。その紙繭に似てなめしうなり。
 人これと。しるなりとのせ。書史會要。宋の
 景德三年。日本の僧寂照。入貢せしとき。南海の商人
 日本よりくる。とき。國王の弟。野人若愚。及び
 左大臣藤原道長。治部卿源從英三人より。寂照の
 もとへおくりたる書と持之れり。みる二王羲之の筆蹟
 なり。なるんづく。若愚の章草。妙いなり。中土の

能書といへども。及び。きり。び。つり。戲鶴堂法帖
 のせむ。日本書の跋に。日本の書。唐人のおと。二
 王の筆と。学が故なりとあり。又日本の僧。釋永傑。字
 斗南。釋中興。字權中。虞永興の書とよき。といふ。
 會要。又米南宮。書史に。陳賢。草書。奇逸にして。辨
 ト。日本書の。とあり。和朝の假名に。との外
 日本書を稱美せし。あけて。吾朝
 古代書法のす。れたる。か。の。れ。も。代
 づ。小。た。ひ。その。と。し。あ。い。末。と

書言 一之卷
学ぶふいなりとれバ。今人々の流義といふもの
ありて。別に一種の體となれるなりん

東江先生書話

書話跋

東江先生居恒有謂。凡學
書。不據魏晉者。妄矣。唐
人祖述。為家。宋已後。以其
意耳。弗取也。橋圭。橋游。于
先生之門。每聞其談論。

隨錄名曰書話。圭橘亦既有大造於斯道也。而吾東方有晉唐書法實從先生始。

東毛田世璉題

書話後序

夫工師教匠人也。必先示之以規矩。而後使其自得之。雖有拙者。不為之改廢繩墨。學者亦必視之規矩。而取法焉。以得盡其所能。皆於己取之而已矣。工師之所以曲盡匠人之用。而匠人之所以得其益也。道世稱工書家。往與古不合也。既無所師法。惟求合吾之。是不知其可也。余友景瑞嘗感王逸少之言。奮然被濯舊習。以求合

契古人於是仍於碑帖學習焉特崇尚右
軍見之羹牆常皇々焉幾得之也不能自
已猶且廢寢食乃志之所至亦何所不得
於我過此以往莫之或知焉不求而得是
與古為徒也幾之所得益信其必至爾其
誨人也則曰人病不求耳古人典刑全在
法書就而學之有餘師然後各從其所好
而惟法是取乎之為貴也其力之所至焉
知不有所得之以自安蓋踐之實言之切

其與得諸口耳者異也故一轉移間其成
功顧不易乎此書所述非託之空言而
其得之於行事也雖似淺近實為學書之
規矩其有補於後進大矣哉

巳丑之夏

松窓 關脩齡 撰



江戸日本橋通三町目

彫工 吉田魚川

明和六己丑年九月日

大坂心齋橋南四町目

吉文字屋市兵衛

江戸日本橋通三町目

同 次郎兵衛



Handwritten text in the bottom right corner of the right page, possibly a signature or date, including the number "1845".

